

2019年度

公益財団法人 高柳健次郎財団

高柳健次郎賞・研究奨励賞・科学放送高柳賞



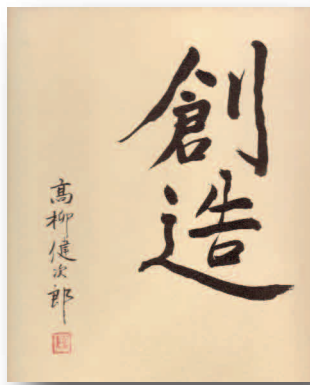
恒に夢を持つこと
志をすてず”
難きにつく

昭和38年1月3日

高柳健次郎



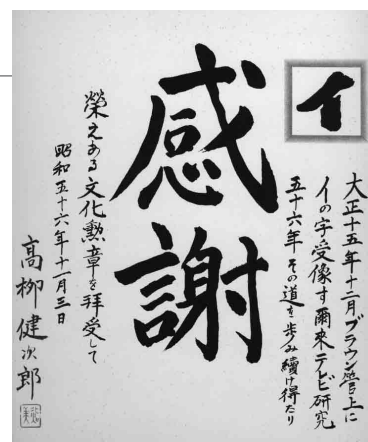
高柳健次郎 書齋にて



よい科学者、技術者である
まことによい人間であれ
高柳健次郎

設立

故高柳健次郎氏が文化勲章の授章に際して、「決して私一人の力で成しえたことではありません」と謙虚に述べ、「初期の研究過程において、研究費の不足に困ったとき助けられた有難さを今も忘れることがない」と感謝の気持ちを表している。そして、これまでに多くの方々から受けたご恩に報い、併せてわが国の電子科学技術の振興に些かなりとも貢献できればと念願し、設立されました。



高柳健次郎の功績 「世界で初めてブラウン管による電子表示に成功」

高柳健次郎博士は、電子式テレビジョンの実現を目指して研究し、1926年12月25日に世界で初めてブラウン管を用いて電子映像表示に成功した。

当時、イギリスでは、1925年にベアードが送受信ともニポーの回転円板を用る機械式テレビジョンの実験に成功、翌年には機械式テレビジョンの公開実験を行っていた。他方、米国、欧州各国などでもテレビジョンの実現に向けた様々な試みが行われていた。

高柳は、機械式では精細な画像表示ができないと判断して、映像を電子的に撮像・表示する電子式テレビジョン技術の開拓に挑戦し、浜松高等工業学校で研究を進めた。1924年12月に電子表示のために独自に開拓した熱陰極ブラウン管の試作を芝浦電気(株)(現東芝)に依頼した。撮像はニポーの円盤で画像を走査し、高速電子回路を開拓して電子映像を作った。1926年12月25日、雲母板上に書いた「イ」の字を、世界で初めてブラウン管上に電子的に表示することに成功した。時あたかも大正天皇が崩御され、その号外新聞発刊の鈴の音を聞きながらであった。こうして、世界初の電子式テレビジョン受像器を実現、それはまた、世界初の電子映像表示装置(ディスプレイ)の達成であった。高柳は1927年には真空管式の撮像管の特許出願を行うなど、その後は電子式テレビジョン放送の実現・発展に貢献した。

他方、アメリカでは、1927年、フィロ・フランスワースが電子式テレビジョンの特許を申請し、1933年にツボルキンがアイコノスコープ(撮像管)を発明し、受像には高柳が達成したブラウン管方式が用いられて、電子式テレビジョンが開拓されていった。

現在、高柳が開拓した電子映像ディスプレイは、テレビジョンの映像表示のみならず、電子機器の発展につれて「人間と機械の対話装置」へと発展し、パソコンやスマートフォンなどの情報通信端末のキーテクノロジーに進化し、現在の情報通信技術社会の発展を支えている。



「イ」の字の表示に用いられたブラウン管

● 目的・事業

当法人は、電子科学技術に関する独創的な研究開発に対し研究助成を行い、また優れた研究業績者を表彰することにより、わが国の科学技術の振興に寄与し、豊かな社会の創造に貢献することを目的としています。その目的を達成するため、下記の事業を行っています。



理事長 末松安晴

〈 高柳健次郎賞 〉

電子科学技術に関する優れた研究により、わが国のこの分野の振興並びに産業の発展に貢献された方々の功績に報い、電子科学技術の更なる発展とその啓蒙に寄与することを目的とした賞です。

- 高柳健次郎賞 1件 表彰盾並びに記念のメダルを贈呈
- 高柳健次郎業績賞 2件 表彰盾並びに副賞として賞金を贈呈

〈 研究奨励賞 〉

将来の発展が期待される独創的な研究に取り組む若い研究者に助成し、わが国の電子科学技術の振興並びに産業の発展に寄与することを目的としています。

- 研究奨励賞 3名～5名 表彰盾並びに副賞として研究助成金を贈呈

〈 科学放送高柳賞 〉

科学技術の振興とその知識の向上に役立つ優れた科学放送番組を奨励し、番組内容の向上に寄与することを目的とした賞です。優れた科学放送番組を放送した放送局を表彰しています。

- 最優秀賞 1件 表彰盾を贈呈
- 優秀賞 2件 表彰盾を贈呈

〈 未来技術フォーラム 〉

電子科学技術の分野で次世代の発展に寄与する最先端の技術や話題をテーマに、年3回開催しています。但し、本年度は休止いたします。

〈設立許可〉

- 1984年(昭和59年) 10月31日 内閣総理大臣・国務大臣科学技術長官より、民法第34条の規定に基づく公益法人として許可を受く。
- 2010年(平成22年) 3月29日 内閣総理大臣より、公益法人認定法第44条の規定に基づく公益財団法人として認定される。
- 2010年(平成22年) 4月 1日 公益財団法人高柳記念電子科学振興財団として法人登記。
- 2011年(平成23年) 5月19日 公益財団法人高柳記念財団へ名称変更。
- 2013年(平成25年) 6月 5日 公益財団法人高柳健次郎財団へ名称変更。

受賞発表

高柳健次郎賞

研究奨励賞

科学放送高柳賞

2019年度 高柳健次郎賞・研究奨励賞・科学放送高柳賞 受賞者

〈贈呈式〉2020年1月20日(月) 千代田放送会館 2Fホール

高柳健次郎賞	<p>Fukushima Kunihiko 福島 邦彦 氏 <研究業績> ニューラルネットワークの先駆的研究とパターン認識への応用</p>
高柳健次郎 業績賞	<p>Okada Kenichi 岡田 健一 氏 <研究業績> CMOS集積回路によるミリ波超高速無線通信技術に関する研究開発</p>
	<p>Funahashi Masakazu 舟橋 正和 氏 <研究業績> 有機ELフルカラー大型ディスプレイ用の青色発光材料の研究と実用化への貢献</p>
研究奨励賞	<p>Shimamura Kohei 嶋村 耕平 氏 <研究課題> Beyond 5G におけるIoTとエネルギーハーベスティング</p>
	<p>SUN Heming 孫 鶴鳴 氏 <研究課題> ヘテロジニアスコンピューティングを活用した圧縮ドメインにおける映像解析</p>
	<p>Nishitsuji Takashi 西辻 崇 氏 <研究課題> 電子ホログラフィ方式の3次元映像技術における高速計算技術</p>
科学放送高柳賞 最優秀賞	<p>● 番組名 「NHKスペシャル 寝たきりからの復活 ～密着!驚異の「再生医療」～」 <放送局> 日本放送協会</p>
科学放送高柳賞 優秀賞	<p>● 番組名 「ハイスクールは水族館!!」 <放送局> 南海放送株式会社</p>
	<p>● 番組名 「ガリレオX 宮大工千年の技 失われ行く工匠の知恵を守れ」 <放送局> 株式会社 BSフジ</p>

高柳健次郎賞

「ニューラルネットワークの先駆的研究と パターン認識への応用」

福島 邦彦 氏

(一財)ファジィシステム研究所 特別研究員 1936年生



[学歴]	1958年	京都大学工学部電子工学科 卒業
[職歴]	1958年	日本放送協会 入局
	1959年	日本放送協会 技術研究所 研究員
	1965年	日本放送協会 放送科学基礎研究所 研究員
	1974年	日本放送協会 放送科学基礎研究所 主任研究員
	1984年	日本放送協会 放送技術研究所 主任研究員
	1989年	大阪大学基礎工学部生物工学科 教授
	1999年	電気通信大学電気通信学部情報通信工学科 教授
	2001年	東京工科大学 教授
	2006年～現在	ファジィシステム研究所 特別研究員

● 主な受賞等

電子情報通信学会 論文賞(1976年,1996年)、業績賞(1982年)、フェロー(2000年)、功績賞(2016年)
放送文化基金賞(1981年)、米国パターン認識学会賞(1984年)、科学技術庁長官賞 研究功績者表彰(1985年)
IEEE ニューラルネットワークバイオニア賞(2003年)
日本神経回路学会 論文賞(2006年)、名誉会員(2006年)、学術賞(2017年)
INNS フェロー(2010年) ヘルムホルツ賞(2012年)

〈主な業績内容〉

福島氏は、NHK放送科学基礎研究所(当時)において、脳の生理学の知見を参考に工学モデルを構築する学際的研究から、パターン認識モデル「ネオコグニトロン」を1979年に開発し、今日のAI技術の中核であるディープニューラルネットワークの基本構造を生み出した。

福島氏の研究は、生理学の知見から情報処理に本質的に役立っている機能の同定と、不足部分の仮説設定とにより、高次脳機能のモデルを構築する研究である。大脳視覚野における線分や線の端点などの局所的な特徴を抽出するモデルや、多層神経回路モデルの入力層に複数のパターンを繰り返し入力すると自動識別機能が出来上がる、教師なし学習多層神経回路モデル「コグニトロン」などを提案した。さらにその発展形として、パターンの変形や位置ずれがあっても同一パターンと認識できるパターン認識モデル「ネオコグニトロン」を実現した。

福島氏はまた、生理学や情報学などの幅広い分野から脳の機能を議論できる場として日本神経回路学会の創設(初代会長)や、国際神経回路学会(INNS)の創設に尽力するなど、本分野における世界的な先駆的指導者として長年研究をリードし多大な功績をあげた。

福島氏の開発したネオコグニトロンの構造を組み込んだ畳み込みニューラルネットワーク(以下CNN)が、近年、画像認識の技術を一変させてきた。画像認識の性能を国際的に競うILSVRC(ImageNet Large-Scale Visual Recognition Challenge)において、2012年にCNNが従来手法を圧倒して大きな話題となり、それ以降でトップの成績であった手法はすべてCNNをベースにしたものである。CNNは画像認識の分野に革命を起こし、音声や言語処理分野、生理学や心理学まで、幅広い分野に波及している。CNNにおけるネオコグニトロンの位置づけについては、科学雑誌Natureを始めとする論文や講演でも触れられており、福島氏のAI技術分野における功績は今や世界的にもゆるぎない。

放送業界におけるAI技術は、福島氏の研究の功績を基に大きな発展を遂げてきた。NHKで研究開発を進める画像処理に関する技術は、本研究成果を礎にしているもので、番組制作の高度化や効率化に大きく貢献している。例えば、氏のモデルを応用して開発した白黒映像の自動カラー化技術により、従来の作業時間を1/60に短縮するなど、制作者の働き方改革にも繋がっている。また、顔画像認識技術では、膨大な映像から特定の出演者シーンを自動で見つけられることから、映像加工や編集の効率化に役立っている。映像要約技術では、カメラワーク度合いや顔領域などの重要度を映像に付与し、制作者が指定する演出意図に応じて短尺映像を自動で生成することも可能である。このように、画像処理による番組制作の高度化・効率化には、福島氏の研究成果であるAI技術が必要不可欠となってきており、さまざまな番組制作に利用されてきている。そのほかにも、音声や言語処理分野も含めて、放送に関わるさまざまな分野にAI技術が活用されて研究開発が進められており、今後も放送技術全般の飛躍的な進展が大いに期待されている。

以上のように、福島氏の独創的な神経回路モデル「ネオコグニトロン」に関する世界的な先駆的研究業績と、AI技術として放送分野にもたらした貢献はきわめて多大である。放送分野にとどまらず、本技術はさまざまな産業分野に影響を与えながら今後も発展し、人々の生活をより便利で豊かにするに違いない。

高柳健次郎業績賞

「CMOS集積回路による ミリ波超高速無線通信技術に関する研究開発」



岡田 健一 氏

東京工業大学 工学院電気電子系・教授 1975生

[学歴]	1998年 3月	京都大学 工学部 電子工学科卒
	2000年 3月	京都大学 大学院 情報学研究科 通信情報システム専攻 修士課程了
	2003年 3月	京都大学 大学院 情報学研究科 通信情報システム専攻 博士課程了
[職歴]	2000年 4月	日本学術振興会 特別研究員
	2003年 4月	東京工業大学 精密工学研究所 助手
	2007年 4月	東京工業大学 大学院理工学研究科 電子物理工学専攻 准教授
	2016年 4月	東京工業大学 工学院 電気電子系 准教授
	2019年 4月	東京工業大学 工学院 電気電子系 教授

● 主な受賞等

2011年 1月	IEEE/ACM ASP-DAC, Special Feature Award
2011年 4月	文部科学大臣表彰 若手科学者賞
2011年 11月	IEEE A-SSCC Best Design Award
2014年 2月	日本学術振興会賞
2015年 6月	末松安晴賞
2017年 1月	IEEE/ACM ASP-DAC, Best Design Award
2017年 4月	文部科学大臣表彰 科学技術賞
2017年 9月	IEEE Radio-Frequency Integration Technology, Best Paper Award
2018年 6月	電子情報通信学会 論文賞
2019年 6月	電子情報通信学会 業績賞
2019年 10月	ドコモ・モバイル・サイエンス賞

〈主な業績内容〉

岡田健一氏は、第5世代移動通信システム(5G)等で必要となる30-300GHzのミリ波帯を用いた超高速無線通信技術の分野で世界的に活躍している著名な研究者である。通信速度の向上には周波数帯域幅の拡大とS/Nの向上が必要であるが、現状利用されている6GHz以下の低マイクロ波帯は様々な無線通信システムで用いられており、これ以上の周波数帯域幅を確保するのは非常に困難であることから、ミリ波を導入するのは無線通信技術としては至極当然な方向性であり、今後、益々の利用拡大が期待されている。ミリ波による無線通信技術の普及のためには、安価で大量生産可能なCMOS集積回路技術での実現が必要であるが、従来技術では伝送速度が不十分であった。

岡田健一氏は、CMOS集積回路によるミリ波無線機の研究分野で一貫して世界をリードしており、ミリ波帯における超高速伝送の可能性を大きく広げている。開発した集積回路を用いて小型低消費電力な無線システムを世界に先駆けて実証し、ミリ波帯無線機の実用化を大きく前進させた。岡田健一氏が考案した技術要件のうち、重要なものを列記すると、注入同期現象を用いた超低位相雑音発振器の実現、ミリ波世界初のダイレクトコンバージョン方式による広帯域化と低消費電力化、帰還抵抗とパッシブミキサによる広帯域化が挙げられる。これらの実証として、2014年には60GHz帯を用いた28Gb/sミリ波無線機を実現し、2016年には42Gb/s、2017年には50Gb/s、2018年には120Gb/sの無線伝送速度を達成し、自らの世界記録を次々と更新している。これら研究成果は、多数の学会賞や、主要国際会議での多数の発表論文を通して広く知られている。また、考案された各種の設計技術を元に企業による商品開発が進められており、今後の飛躍的普及によりICT社会インフラを構築する原動力となることが期待される。

高柳健次郎業績賞

「有機ELフルカラー大型ディスプレイ用の 青色発光材料の研究と実用化への貢献」



舟橋 正和 氏

出光興産株式会社 電子材料部 電子材料開発センター所長付(材料開発担当) 1967生

【学歴】 1993年 3月 東京工業大学大学院 理工学研究科応用化学専攻 修士課程修了

【職歴】 1993年 4月 出光興産株式会社 入社

2008年 7月 電子材料部 電子材料開発センター 主任研究員

2017年 4月 電子材料部 電子材料開発センター 所長付

● 主な受賞等

平成30年度全国発明表彰 恩賜発明賞受賞

〈主な業績内容〉

有機エレクトロルミネッセンス（以下、「有機EL」と略記する）ディスプレイは自発光方式のため、従来の薄型ディスプレイである液晶ディスプレイと異なり、バックライトが不要でシンプルな素子構造をとることが可能で、5mm程度の薄さを実現できる。更に、消費電力、視野角、コントラスト比、応答速度、黒色の再現性、フレキシブル性等でも液晶に比べて優位性があることが知られている。

舟橋正和が開発した技術は、実用レベルの発光効率と長寿命のみならず、製造プロセス性にも優れる青色有機EL発光を実現した。これにより、携帯電話などの小型デバイスから大型TVまでの幅広い有機ELフルカラーディスプレイの実用化に大きく貢献した。

有機EL技術の本命は、スマートフォンや大型有機ELTVといったフルカラーディスプレイへの適用であるが、その実現には、色再現性を高めるために色純度が高い光の三原色（赤、緑、青）発光素子が必要となる。しかしながら、2002年頃の有機EL素子の技術水準は、水色や緑色、赤色有機ELについては上市レベルの有機EL材料が存在していたが、発光に最も高いエネルギーを必要とする純青色有機EL素子においては、色純度、発光効率、寿命特性等を全て満足する有機EL材料は存在していなかった。

有機EL素子は、電圧を印加することで、陽極から注入された正孔と陰極から注入された電子が発光層内で再結合して有機EL材料が励起状態になり、これが基底状態に戻る際にそのエネルギーを光として放出する原理を利用したデバイスである。

2002年、舟橋らは、再結合と発光、それぞれの機能を2つの特定の化合物に役割分担し、それらを組合せた有機EL素子により、純青色発光で、高効率、長寿命化を達成した。

純青色有機ELの先駆的発明である本技術の適用により、有機EL素子における実用レベルでの3原色発光が可能となり、近年の有機ELフルカラーディスプレイを搭載した高性能機器の発展に大きく貢献した。

本技術は、2004年に携帯電話のサブディスプレイに適用されたことを皮切りに、2007年から中小型ディスプレイ商品である携帯電話、小型TV、スマートフォンに適用された。

舟橋は、その後、さらなる改良・開発を進め、特定構造のアントラセン系化合物と、環構造や置換基等の分子構造を制御した縮合環アミン化合物を開発した。これら新たに開発した化合物は、純青色発光に向けた電気物性や光学物性等の各種材料特性に好適であるのみならず、熱的・光化学的・電気化学的安定性を有している。特に、純青色発光のための重要な項目である発光スペクトル制御において、独創的かつ精緻な分子設計により新規縮合環アミン化合物を創製し、その実現を可能とした。

大型ディスプレイ実現には、小型ディスプレイに比べて、より高い特性が要求される。具体的には、発光効率や寿命特性の向上に加え、高温・高真空下の蒸着プロセス安定性に優れる有機EL材料が求められる。

舟橋が新たに開発したアントラセン系化合物や縮合環アミン化合物は、大型蒸着装置における蒸着安定性や大面積均一成膜性、長時間連続運転に耐える熱安定性にも優れるため、大型有機ELディスプレイ量産製造への適用が可能な純青色材料である。この技術を使用した純青色有機ELは、2013年に大型有機ELTVにも適用された。

その後、舟橋の開発技術は、様々な商品にも応用され、近年の4K有機ELTVの発展及び有機EL市場の拡大に貢献している。

研究奨励賞



● 研究課題

「Beyond 5G における IoT とエネルギーハーベスティング」

嶋村 耕平 氏

筑波大学 システム情報系構造エネルギー工学域 助教(工学博士)1985生

〈研究概要〉 ケータイ基地局からの電波を用いたエネルギーハーベスティングや、ワイヤレスセンサによるIoTへの応用には電波によるワイヤレス給電技術が不可欠である。この技術では、送電に用いる電波の作動周波数が高くなるほど電波の直進性が強くなり、長距離送電を高効率に行うことができる。さらに受信回路が小型になるため、複数アレイ化することにより大電力ワイヤレス給電が可能となる。本研究では従来ワイヤレス給電に広く用いられているマイクロ波帯の100倍程度高い動作周波数である303 GHzでのワイヤレス給電実験に成功した。この実験は世界最高動作周波数でのマイクロ波ワイヤレス給電であることが評価され、権威あるIEEE Microwave and Wireless Components Letterに掲載された。

今後の展望としては、「5G」といった電波の周波数帯の拡大が大きな注目を集めており、高周波帯での通信、ワイヤレス給電のニーズが拡大すると予想される。また超高速通信規格「5G」の次の世代にあたる「Beyond 5G」の周波数帯域幅を2030年代に新たに確保される見通しである。全自動運転や電力のワイヤレス給電といった新技術の開発を推進が期待されている。一方で今回の実験委用いたサブテラヘルツ帯ワイヤレス給電は長距離大電力用途に適していますが、整流効率はマイクロ波帯と比べて大きく劣る。そのため、高周波対応かつ大電力出力可能な整流ダイオードの開発が求められており、GaNダイオードや非半導体ダイオードなど新たに開発することで課題解決に取り組んでいる。



● 研究課題

「ヘテロジニアスコンピューティングを活用した 圧縮ドメインにおける映像解析」

孫 鶴鳴 氏

早稲田大学 理工学術院総合研究所

最先端ICT基盤研究所 次席研究員(研究院講師)(工学博士)1989生

〈研究概要〉 近年、ビデオデータに膨大な情報が含まれているため、映像解析はスマートInternet of Things (IoT)社会にとって非常に重要な役割を果たしている。映像解析の一般的なプロセスはビデオエンコーダ、ビットストリーム転送、デコーダ及び分析(物体識別、異常検知など)からなる。しかしながら、分析は通常復号化されたピクセルドメインで行われるので、複雑さが高いデコードは避けられない。従って、圧縮ドメインのまま高速実行可能な低消費電力映像解析の技術が求められる。

そこで本研究では二つの側面から提案する。ビデオ復号化の複雑さを軽減する為に、圧縮ストリーム内の時間的、空間的及び周波数的な特徴のみを復号して、その三つの特徴に基づいて映像解析を行う。具体的には、ディープラーニング(DL)を使用して、三つの特徴間の最適な線形または非線形関係を見出し、ピクセルドメインの手法と同じレベルの映像分析精度を達成することを目指す。また、高性能電力比を達成するために、汎用的な GPU を使わず、FPGA(Field- Programmable Gate Array)に基づいて、専用の DL プロセッサを開発する。CPU と組み合わせることでヘテロジニアスコンピューティング環境を構築し、必要な映像特徴の復号と DL 計算を CPU と FPGA にそれぞれ分散実装することで、従来手法より数倍優れた性能電力比を達成することを目標とする。

研究奨励賞



● 研究課題

「電子ホログラフィ方式の3次元映像技術における 高速計算技術」

西辻 崇 氏

首都大学東京 システムデザイン学部 電子情報システム工学科 助教(工学博士)1989生

〈研究概要〉 電子ホログラフィ方式の3次元映像技術は、生理的に最も自然な3次元映像を再生可能なことから、究極の3次元映像技術と称されるほど高く期待されている。しかし、映像再生に必要な計算量の膨大さを一因に実用化には至っていない。必要な計算性能は世界最高性能のスーパーコンピュータの1万倍以上とも試算され、近年のコンピュータの進化に鑑みても早期の実用化は容易ではなく、未来社会に向けたグランドチャレンジの1つに数えられる。

本研究では、計算量の削減(ソフトウェア)と計算機実装(ハードウェア)の両面から係る課題に取り組んでいる。計算機は用途を限定すると使用電力や回路規模に対する計算効率を大幅に高められる。本研究では、ホログラフィの計算に特化した専用計算機開発を目的に、ホログラフィの光学的な特性を考慮した計算量削減手法を開発、専用計算機に組み込むことで、計算性能の向上を実現した。現在は専用計算機の大規模並列化システムの開発を進めており、電子ホログラフィの早期実用化を目指している。

研究奨励賞 研究成果論文

当財団では、研究奨励賞贈呈者に対して、受贈後の2年間での研究成果について報告をお願いしています。報告された研究成果論文は、当財団のホームページで公開いたします。

本年度は、2016年度贈呈者の研究成果論文をホームページに公開いたしました。

片宗 優貴 氏(九州工業大学 若手研究者フロンティア研究アカデミー 特任助教)

● 研究課題 「パワーデバイス応用に向けたダイヤモンド半導体のオーミック接触形成に関する研究」

金子 健太郎 氏(京都大学 大学院工学研究科 附属光・電子理工学研究センター 助教)

● 研究課題 「コランダム構造酸化物混晶による高機能半導体膜の開発」

松本 圭介 氏(愛媛大学 大学院 理工学研究科 助教)

● 研究課題 「高速コンピュータ冷却に用いる電子スピンを利用した磁気冷凍材料の開発」

ホームページ <https://takayanagi.or.jp> 研究奨励賞 をご参照ください。

科学放送高柳賞 最優秀賞

番組名 「NHKスペシャル 寝たきりからの復活 ～密着!驚異の「再生医療」～」

●放送局:日本放送協会 ●放送日:2019年5月4日(49分間)



病气やけがで損傷した臓器・組織の“自己再生能力”を活性化させることで治療する「再生医療」。2019年5月、一度失った神経の機能を取り戻す再生医療が日本で保険適用となり、世界に先駆けて、実際の治療が始まった。

番組では、札幌医科大学が行ってきた治験に3年間密着、脊髄損傷の患者が驚異的な回復を遂げていく様子をつぶさに記録した。治療に使うのは、「間葉系幹細胞」と呼ばれる、私たちの体の中にある「体のさまざまな組織に分化する能力を持った」細胞。一度、注射するだけで、損傷した神経細胞が回復を遂げていく。高飛び込みの練習中の事故で脊髄損傷となった患者は、自宅で1人暮らしをできるまでに回復。仕事上の事故

で全身麻痺となり、一生入院生活を覚悟した患者は、治療から2年で、念願の帰宅を果たした。患者は、病状が回復するだけではない。生きる力と希望を取り戻し、新しい人生を歩んでいく。

再生医療は、iPS細胞やES細胞を使った再生医療の研究開発が進む。脳梗塞やパーキンソン病や、認知症まで、治療の難しい病の克服など、これまでにない恩恵をもたらすと期待されている。新たな再生医療が、私たちの「生きる」をどのように変えていくのか。その驚くべき実像に迫った。

科学放送高柳賞 優秀賞

番組名 「ハイスクールは水族館!!」

●放送局:南海放送株式会社 ●放送日:2019年5月25日(43分間)



かつて四国初の水族館があった愛媛県大洲市長浜。この町には今、老若男女で賑わう水族館があります。それは県立長浜高校の中にある『長高水族館』。運営を行っているのは「水族館部」の部員たちです。

部員たちは150種類2000匹の海や川の生物を飼育し、毎月無料で一般に公開したり、研究を行ったりしています。2016年には“科学のオリンピック”と言われる「国際学生科学技術フェア」で4等を受賞、世界的な注目を浴びました。「カクレクマノミはなぜイソギンチャクに刺されないのか」を研究し原因を突き止めたのです。この研究にヒントを得て、クラゲに刺されない“クラゲ予防クリーム”の開発が始まりました。

一般公開でお客さんに一番人気があるは「トミーのハマチショー」です。

考案した部員が「世界初」と自負するハマチの輪くぐりショー。日々訓練を重ねハマチに芸を仕込むことに成功しました。そんな中、地元の町を豪雨が襲います。被災した町や魚。20年続けてきた一般公開はどうなるのでしょうか。そして“クラゲ予防クリーム”開発の行方は…。魚を愛する高校生が小さな命に向き合う3年間の物語です。

科学放送高柳賞 優秀賞

番組名 「ガリレオX 宮大工千年の技 失われ行く工匠の知恵を守れ」

●応募放送局:株式会社BSフジ ●放送日:2018年12月23日(26分間)



日本の神社仏閣を守る上で欠かせない存在である宮大工。2018年、彼らが継承してきた伝統建築工匠の「技」が、2020年登録を目指すユネスコ無形文化遺産の候補として申請されました。なぜ近年になり宮大工の技術が再評価されているのか？そこに注目すると、荘厳で優美な美しさを神社仏閣に与えながらも、解体を容易にする巧みな「技」や、宮大工の「歴史」に隠された意外な事実が見えてきました。また、その一方で宮大工達が、「今」抱えている2つの大きな課題も同時に浮かび上がってきました。一つは、神社仏閣を補修する際に用いる「道具」の不足。そしてもう一つは、宮大工を含む大工界全体が陥っている「人材」不足です。そういった問題を解決するため、宮大工や大工達が手作業で

行っている技を模倣するロボットの開発や、宮大工の新たな担い手を育成するための養成所の設立など、様々な取り組みが始まっています。番組では宮大工の「技」と「歴史」と「今」に迫ることで、宮大工の未来を探りました。

■ 放送期間 / 2018年9月1日～2019年8月31日 ■ 応募放送局 / 11局 ■ 応募番組数 / 15番組

入賞番組の一般公開

本年度の入賞番組は、制作局の了解の上、公益財団法人放送番組センターが運営する、放送番組専門の公開施設「放送ライブラリー」において、後日、一般に無料で公開することにしております。

◆放送番組専門の公開施設「放送ライブラリー」のご案内

- 場 所 横浜情報文化センター 8F
神奈川県横浜市中区日本大通11 TEL.045-222-2828
(交通アクセス)みなとみらい線「日本大通り駅」3番出口(情報文化センター口)直結
JR根岸線・横浜市営地下鉄「関内駅」徒歩10分
- 開館時間 10時～17時 (視聴受付は、閉館30分前まで)
- 休 館 日 毎週月曜日(祝日・振替休日の場合は、次の平日)、年未年始

公益財団法人番組放送センターの「放送ライブラリー」は、放送法に基づく、わが国唯一の放送番組専門のアーカイブ施設であり、NHKと民放のテレビ、ラジオ番組とCMを公開しています。

詳細は、ホームページ <http://www.bpcj.or.jp/> をご参照ください。

歴代受賞一覧

高柳健次郎賞

研究奨励賞

科学放送高柳賞

■ 高柳健次郎賞・受賞者一覧

年度	氏名	受賞時の所属・職名	
2018年	吉野 武彦	日本放送協会	元 専務理事・技師長
2017年	須崎 涉	大阪電気通信大学	名誉教授
2016年	内田 龍男	東北大学	名誉教授
2015年	宮原 秀夫	大阪大学	元総長
2014年	大場 吉延	日本放送協会	元 理事
2013年	白井 克彦	放送大学学園	理事長
2012年	安田 浩	東京電機大学 未来科学研究科	委員長・教授
2011年	泉 武博	日本放送協会 放送技術研究所	元 所長
2010年	青木 利晴	株式会社NTTデータ	元 社長
2009年	相磯 秀夫	東京工科大学	理事・前学長
2008年	金子 尚志	日本電気株式会社	名誉顧問
2007年	長谷川 豊明	日本放送協会	元 専務理事・技師長
2006年	辻井 重男	情報セキュリティ大学院大学	学長
2005年	立川 敬二	独立行政法人 宇宙航空研究開発機構	理事長
2004年	安田 靖彦	早稲田大学 理工学部	教授
2003年	嵩 忠雄	大阪大学	名誉教授
2002年	中村 好郎	日本放送協会	元 副会長
2001年	中原 恒雄	住友電気工業株式会社	特別技術顧問
2000年	長尾 真	京都大学	総長
1999年	林 宏三	日本放送協会 放送科学基礎研究所	元 所長
1998年	熊谷 信昭	大阪大学	元総長
1997年	斎藤 成文	東京大学	名誉教授
1996年	藤尾 孝	大阪工業大学	客員教授
1995年	岩崎 俊一	東北工業大学	学長
1994年	野村 達治	日本放送協会	元 専務理事・技師長
1993年	植之原 道行	日本電気株式会社	特別顧問
1992年	岡村 總吾	東京電機大学	学長
1991年	鈴木 桂二	長岡技術科学大学	名誉教授
1990年	宇都宮 敏男	東京理科大学 理工学部	教授
1989年	大島 信太郎	国際電信電話株式会社	元 副社長
1988年	瀧 保夫	東京理科大学 基礎工学部	学部長
1987年	平山 博	早稲田大学 理工学部	教授
1986年	尾上 守夫	株式会社 リコー	専務取締役
1985年	坂井 利之 樋渡 涓二	京都大学 工学部 筑波大学 電子・情報系	教授 教授

■ 財団設立からの累計受賞者36名(1985年度～2012年度 高柳記念賞)

■ 高柳健次郎業績賞・受賞者一覧

年度	氏名	受賞時の所属・職名
2018年	高 村 誠 之	NTTメディアインテリジェンス研究所 主幹研究員
2017年	藤 田 智 成 星 沢 拓 彦 石 井 紀 彦	NTTソフトウェアイノベーションセンタ 分散処理基盤プロジェクト 日立製作所 研究開発グループ テクノロジーイノベーション統括本部 日本放送協会 放送技術研究所 新機能デバイス研究部 主任研究員 部長 上級研究員
2016年	稲 見 昌 彦 島 本 洋	東京大学 先端科学技術研究センター 日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部 教授 上級研究員
2015年	柏 野 邦 夫 西 田 幸 博	日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所 日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部 上席特別研究員 上席研究員
2014年	田 中 祥 次 松 尾 義 博	日本放送協会 放送技術研究所 伝送システム研究部 日本電気株式会社 メディアインテリジェンス研究所 上級研究員 主幹研究員
2013年	松 村 欣 司 高 橋 敏	日本放送協会 放送技術研究所 日本電信電話株式会社 メディアインテリジェンス研究所 主任研究員 主席研究員
2012年	今 井 亨 久 山 田 悦 久	日本放送協会 技術局 計画部 三菱電機株式会社 情報技術総合研究所 映像情報処理技術部 副部長 主席技師長
2011年	川 村 龍 太 郎 角 尾 幸 保	日本電信電話株式会社 未来ねっと研究所 日本電気株式会社 情報・メディアプロセッシング研究所 メディアイノベーション研究部長 主席研究員
2010年	岩 館 祐 一 長 沼 次 郎	日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部 NTTエレクトロニクス株式会社 デジタル映像事業本部 主任研究員 主事
2009年	藤 井 哲 郎 白 川 洋 潮 細 川 地 潮	東京都市大学 環境情報学部 NTTスマートコネクスト株式会社 出光興産株式会社 教授 取締役 電子材料開発C
2008年	丸 山 裕 孝 江 藤 剛 治 中 村 淳 一	日本放送協会 放送技術研究所 近畿大学 理工学部 アプティナ・ジャパン株式会社 主任研究員 教授 代表取締役
2007年	川 添 雄 彦	日本電信電話株式会社 NTTサイバーソリューション研究所 主幹研究員
2006年	金 澤 勝	日本放送協会 放送技術研究所 主任研究員
2005年	八 島 由 幸	日本電信電話株式会社 NTTサイバースペース研究所 主幹研究員
2004年	小 池 康 博	慶應義塾大学 理工学部 教授
2003年	佐々木 誠	日本放送協会 放送技術研究所 デジタルネットワーク部長
2002年	大 塚 作 一	株式会社NTTデータ 技術開発本部 コンテンツ管理技術グループ・部長
2001年	榎 啓 一 松 永 真 理 土 井 利 忠	株式会社NTTドコモ iモード事業本部 松永真理事務所 ソニー株式会社 取締役 本部長 代表取締役 執行役員上席常務
2000年	加 藤 久 和 村 瀬 洋	日本放送協会 技術局開発センター 日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所 チーフエンジニア メディア情報研究部 Gリーダー
1999年	松 山 駿 介 中 村 修 二	富士通日立プラズマディスプレイ株式会社 日亜化学工業株式会社 専務取締役 開発部 主幹研究員
1998年	小 野 定 康 斉 藤 敬	日本電信電話株式会社光ネットワークシステム研究所 キャノン株式会社 B製品事業本部 小野特別研究室 室長 常務取締役 本部長
1997年	篠 原 紘 一 村 上 宏	松下電器産業株式会社 日本放送協会 放送技術研究所 AVC商品開発研究所 主担当 表示・光デバイス 部長
1996年	森 健 一 寺 昌 章	株式会社東芝 オリンパス光学工業株式会社 常務取締役 取締役 第3事業部長
1995年	清 水 宏 紀 野 村 武 史	日本ビクター株式会社 TDK株式会社 取締役 ビデオ事業本部長 基礎材料研究所 部長
1994年	西 脇 秀 則 鷲 塚 諫	三洋電機株式会社 ニューマテリアル研究所 シャープ株式会社 液晶事業本部 太陽電池研究室長 専務取締役 本部長
1993年	萩 本 和 男 吉 田 真 澄	日本電信電話株式会社 伝送システム研究所 株式会社富士通研究所 マルチメディア研究所 光通信研究部 主幹研究員 テクノロジー研究部門長付
1992年	谷 岡 健 吉 土 屋 裕	日本放送協会 放送技術研究所 浜松ホトニクス株式会社 中央研究所 映像デバイス研究部主任研究員 所長代理
1991年	木 目 健 治 朗 藤 原 淑 男	三菱電機株式会社 電子商品開発研究所 ソニー株式会社 ビジネス&プロフェッショナル開発本部 開発第3部 第4グループマネージャー 本部長
1990年	秋 山 郁 男 藤 原 慎 司	日本電気株式会社 映像開発本部 松下電器産業株式会社 情報機器研究所 第一開発部・課長 入力デバイス開発室長
1989年	江 藤 良 純 大 島 正 毅	株式会社日立製作所 中央研究所 工業技術院電子技術総合研究所 第5部 主管研究員 知能システム部 視覚情報研究室長
1988年	村 上 仁 己 廣 田 昭	国際電信電話株式会社 上福岡研究所 日本ビクター株式会社 画像通信研究室長 取締役ビデオ研究所長
1987年	野 村 龍 男 木 戸 出 正 継	日本放送協会 放送技術研究所 株式会社東芝 総合研究所 主任研究員 技術管理部 課長
1986年	安 田 浩 二 熊 田 純	日本電信電話株式会社 複合通信研究所 日本放送協会 放送技術研究所 画像通信方式研究室長 ハイビジョン研究開発グループ

■ 財団設立からの累計受賞者（61件）65名（1986年度～2012年度 高柳記念奨励賞）

研究奨励賞・受賞者一覧

年度	氏名	受賞時の所属先	年度	氏名	受賞時の所属先		
第35回 2018年	相澤直矢 角江崇 安田充	九州大学 相盛フロンティア研究センター 千葉大学 大学院工学研究院 関西学院大学 理工学部	准教授 助教 特命助教	第15回 1998年	横矢直和 和田智志 深見正	奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 東京農工大学 工学部 応用化学科 金沢工業大学 工学部 電気・電子系	教授 助手 助教授
第34回 2017年	藤田桂英 平山竜士 森本勝大	東京農工大学 大学院工学研究院 千葉大学 大学院工学研究院 富山大学 大学印理工学研究所	准教授 特別研究員 特命助教	第14回 1997年	笹尾勤 鳥養映子 浅田雅洋	九州工業大学 情報工学部 電子情報工学科 山梨大学 工学部 電子情報工学科 東京工業大学 工学部 電気電子工学科	教授 助教授 助教授
第33回 2016年	片宗優貴 金子健太郎 松本圭介	九州工業大学 若手研究者フロンティアアカデミー 京都大学 大学院工学研究科 愛媛大学 大学院理工学研究科	特任助教 助教 助教	第13回 1996年	宮崎正弘 白井肇 荒川薫	新潟大学 工学部 情報工学科 埼玉大学 工学部 機能材料工学科 明治大学 理工学部 情報科学科	教授 助教授 助教授
第32回 2015年	安在大祐 久保亮吾 真部雄介	名古屋工業大学大学院 工学研究科 慶應義塾大学 理工学部 電子工学科 千葉工業大学 情報科学部	助教 専任講師 准教授	第12回 1995年	荒川泰彦 山本節夫 奥村次徳 小谷一孔	東京大学 生産技術研究所 山口大学 工学部 機能材料工学科 東京都立大学 工学部 北陸先端科学技術大学院大学 情報科学研究科	教授 助教授 教授 助教授
第31回 2014年	榎本光一郎 片山昇 高村陽太	新潟大学大学院 自然科学研究科 東京理科大学 理工学部 電気電子情報工学科 東京工業大学大学院 理工学研究科	助教 助教 助教	第11回 1994年	武藤佳恭 林真至 森迫昭光 酒井士郎	慶應義塾大学 環境情報学部 神戸大学 工学部 電気電子工学科 信州大学 工学部 徳島大学 工学部 電気電子工学科	助教授 助教授 助教授 教授
第30回 2013年	安井隆雄 周大江 西祐希	名古屋大学 工学研究科 早稲田大学大学院 情報生産システム研究科 金沢工業大学 光電相互変換デバイス研究開発センター	助教 助教 研究員	第10回 1993年	山本真司 若林真一 田中国昭 平井有三	豊橋技術科学大学 工学部 知識情報工学系 広島大学 工学部 第二類 電気系 千葉大学 工学部 電気電子工学科 筑波大学 電子・情報工学系	教授 助教授 教授 教授
第29回 2012年	延兼啓純 田中一晶 木村貴幸	北海道大学大学院 理学研究院物理学部門 大阪大学 工学研究科 日本工業大学 工学部 電気電子工学科	助教 特任助教 助教	第9回 1992年	蛸原健治 篠田庄司 田坂修二 松田甚一	熊本大学 工学部 電子情報工学科 中央大学 理工学部 名古屋工業大学 工学部 電気情報工学科 長岡技術科学大学 工学部 電気系	教授 教授 教授 教授
第28回 2011年	村岡貴博 井上亮文 鈴木健仁	東北大学 多元物質科学研究所 東京工科大学 コンピュータサイエンス学部 茨城大学 工学部 電気電子工学科	助教 講師 助教	第8回 1991年	新井宏之 白石和男 半谷精一郎 渡辺治	横浜国立大学 工学部 電子情報科学科 宇都宮大学 工学部 電気電子工学科 東京理科大学 工学部 電気工学科 東京工業大学 工学部 情報工学科	助教授 助教授 助教授 助教授
第27回 2010年	石淵久生 山口実靖 宮崎大介	大阪府立大学 大学院工学研究科 工学院大学 情報通信工学科 大阪市立大学 大学院工学研究科	教授 准教授 准教授	第7回 1990年	伊藤彰義 岡野光治 橘邦英 根本幾	日本大学 理工学部 電子工学科 東京大学 工学部 物理工学科 京都工芸繊維大学 工学部 電子情報工学科 東京電機大学 理工学部	教授 教授 教授 助教授
第26回 2009年	長谷川浩 海老原聡 野村孝徳	名古屋大学 大学院工学研究科 大阪電気通信大学 工学部 和歌山大学 システム工学部 メカトロニクス学科	准教授 准教授 教授	第6回 1989年	加藤誠巳 小松尚久 寅市和男 三橋涉	上智大学 理工学部 電気・電子工学科 早稲田大学 理工学部 電子通信学科 筑波大学 電子・情報工学系 電気通信大学 電子情報科学科	教授 講師 教授 助手
第25回 2008年	水柿義直 多田和也 石塚洋一	電気通信大学 電気通信学部 兵庫県立大学 大学院工学研究科 長崎大学 工学部 電気電子工学科	准教授 准教授 准教授	第5回 1988年	浅田邦博 吉田雄二 小柴正則 大津元一	東京大学 工学部 電子工学科 名古屋大学 工学部 情報工学科 北海道大学 工学部 電子工学科 東京工業大学 総合理工学研究科	助教授 教授 教授 助教授
第24回 2007年	谷井孝至 白谷正治 岡野好伸	早稲田大学 理工学術院 基幹理工学部 九州大学 システム情報科学研究院 武蔵工業大学 知識工学部 ネットワーク工学科	准教授 教授 准教授	第4回 1987年	美濃導彦 白鳥則郎 山田実巖 笹瀬	京都大学 工学部 高度情報開発実験施設 東北大学 工学部 電気通信研究所 金沢大学 工学部 電気情報工学科 慶應義塾大学 理工学部 電気電気工学科	助手 助教授 教授 助手
第23回 2006年	渡邊慎也	青山学院大学 理工学部 電気電子工学科	助手	第3回 1986年	小長井誠 西川博昭 大西公平	東京工業大学 工学部 電気・電子工学科 大阪大学 工学部 電子工学科 慶應義塾大学 理工学部 電気工学科	助教授 助手 専任講師
第22回 2005年	中川清 磯村雅夫	香川大学 工学部 信頼性情報システム工学科 東海大学 電子情報学部 電気電子工学科	教授 助教授	第2回 1985年	坂内正夫 広田修 天野英晴	東京大学 生産技術研究所 相模工業大学 情報工学科 慶應義塾大学 理工学部 電気工学科	助教授 助教授 助手
第21回 2004年	棟安実治 鷲殿治彦	関西大学 工学部 電子工学科 茨城大学 工学部 電気電子工学科	助教授 助教授	第1回 1984年	斎藤省吾 榊裕之	九州大学 総合理工学研究科 東京大学 生産技術研究所	教授 助教授
第20回 2003年	出口博之 井須尚紀	同志社大学 工学部 電子工学科 三重大学 工学部	助教授 教授				
第19回 2002年	六車仁志 木村宏	芝浦工業大学 工学部 電子工学科 岐阜大学 工学部 電気電子工学科	助教授 助教授				
第18回 2001年	寺内衛 西村俊和 入江聡 小林春夫	広島市立大学 情報科学部 情報工学科 立命館大学 理工学部 情報科学科 福井大学 工学部 材料開発工学科 群馬大学 工学部 電気電子工学科	助教授 助教授 助手 助教授				
第17回 2000年	渡邊高志 長田康敬 岸田悟 岩月正見	東北大学 大学院 工学研究科 琉球大学 工学部 電気電子工学科 鳥取大学 工学部 電気電子工学科 法政大学 工学部 電気電子工学科	講師 助教授 助教授 助教授				
第16回 1999年	大森裕 和田修巳 山田功	大阪大学 大学院 工学研究科 岡山大学 工学部 電気電子工学科 山形大学 工学部 電子情報工学科	助教授 助教授 助手				

■ 財団設立からの累計受賞者（74大学112名）／累計助成金額 21,560万円（1984年度～2012年度 研究助成）

■ 科学放送高柳賞 受賞番組並びに放送局

(第28回～第43回 科学放送高柳記念賞/第44回科学放送 高柳健次郎賞)

回数/年度	受賞名	番組名	放送局名
49回 2018年	最優秀賞	「パラリンピックドキュメンタリーシリーズ「WHO I AM」森井大輝(日本/アルペンスキー)」	株式会社WOWOW
	優秀賞	「衝撃!未来テクノロジー 2030年世界はこう変わる」	株式会社BSテレビ東京
	優秀賞	「NHKスペシャル シリーズ古代遺跡透視 大ピラミッド発見!謎の巨大空間」	日本放送協会
48回 2017年	最優秀賞	「カムイの鳥の軌跡 ～オオジシギ2つの物語～」	北海道テレビ放送株式会社
	優秀賞	「ゴミノヒカリ～未来を照らすアルミゴミ発電～」	株式会社チューリップテレビ
	優秀賞	「村山斉の宇宙をめぐる大冒険」	日本放送協会
47回 2016年	最優秀賞	NHKスペシャル「ミラクルボディー 世界最強の人魚たち」	日本放送協会
	優秀賞	カンブリア宮殿 「世界が驚いた新素材革命!人口モ糸&石から作る"魔法の紙"」	株式会社テレビ東京
	優秀賞	「野生のいのち 死の連鎖」	北海道テレビ放送株式会社
46回 2015年	最優秀賞	SBS防災特別番組「富士山鳴動す-火の山の危機と予知-」	静岡放送株式会社
	優秀賞	「トキ 新世界を生きる」	株式会社新潟放送
	優秀賞	NHKスペシャル「腸内フローラ～解明!驚異の細菌パワー～」	日本放送協会
45回 2014年	最優秀賞	NHKスペシャル「アルツハイマー病をくい止める!」	日本放送協会
	優秀賞	テレビ東京系列「カンブリア宮殿」ノーベル賞御用達! "光の技術を極める超絶企業"」	株式会社テレビ東京
	優秀賞	TOYAから明日へ! 「氷の島のメッセージ」～グリーンランド温暖化の最前線から～	北海道テレビ放送株式会社
44回 2013年	高柳健次郎賞	未来世紀ジパング～"アルマ展望台"プロジェクト	株式会社テレビ東京
	奨励賞	NHKスペシャル「世界初撮影! 深海の巨大イカ」	日本放送協会
	奨励賞	生命38億年スペシャル-最新遺伝子ミステリー- 「人間とは何だ…!？」	株式会社TBSテレビ
43回 2012年	高柳記念賞	NHKスペシャル「宇宙の渚」第1集-謎の閃光 スプライト	日本放送協会
	奨励賞	KBSふるさとスペシャル「未来を回せ～富山発-小水力発電の可能性～」	北日本放送株式会社
	奨励賞	「風を集めて"レンズ風車"未来への挑戦」	RKB毎日放送株式会社
42回 2011年	高柳記念賞	「クニマスは生きていた!」	株式会社毎日放送
	奨励賞	コスミック フロント ～発見! 驚異の大宇宙～「迫りくる太陽の異変」	日本放送協会
	奨励賞	チャンネル4「三兄弟が挑んだ命の鼓動～国産初-植え込型補助人工心臓開発物語～」	株式会社テレビ信州
41回 2010年	高柳記念賞	「神の鳥からの警告」	富山テレビ放送株式会社
	奨励賞	NHKスペシャル「ハッブル宇宙望遠鏡 宇宙の始まりに挑む」	日本放送協会
	企画賞	「人類よ 宇宙人になれ 立花隆VS小学生」	日本放送協会
	企画賞	「ノンフィクションW」街が踊る!ビルが笑う!デジタルサイネージで変わる世界	株式会社WOWOW
40回 2009年	高柳記念賞	「クエスト～探求者たち～ 宇宙エレベーターで宇宙へ! 青木義男教授の挑戦」	株式会社WOWOW
	奨励賞	「富山湾-あいの海」	富山テレビ放送株式会社
	奨励賞	NHKスペシャル「病の起源 第4集 読字障害～文字が生んだ病～」	日本放送協会
	企画賞	「ニッポンの恐竜はどこから来たのか」	福井放送株式会社
39回 2008年	高柳記念賞	素敵な宇宙船地球号「世界遺産の光と影 Vol.9～屋久島のいのちの森～」	株式会社テレビ朝日
	奨励賞	「めんたいキッズ08～こどもたちが番組作りに挑戦～」	株式会社福岡放送
	奨励賞	NHKスペシャル「眠れる再生力をよびませ～脳梗塞-心筋梗塞治療への挑戦～」	日本放送協会
	企画賞	「探Qサイエンス」	株式会社テレビ西日本
38回 2007年	高柳記念賞	NHKスペシャル「赤ちゃん 成長の不思議な道のり」	日本放送協会
	奨励賞	「因島造船物語 撓鉄と生きる人々」	株式会社テレビ新広島
	奨励賞	「豊かな干潟～坂田明が見た豊前海の神秘～」	大分朝日放送株式会社
	企画賞	素敵な宇宙船地球号「CO2スリム大作戦」	株式会社テレビ朝日
37回 2006年	高柳記念賞	「カナリヤの子供たち～検証-化学物質過敏症～」	日本テレビ放送網株式会社
	奨励賞	ガイアの夜明け「最先端!オーダーメイド医療～あなただけの治療法選びます～」	株式会社テレビ東京
	奨励賞	「SBSスペシャル 秋津の岸边」	静岡放送株式会社
	企画賞	素敵な宇宙船地球号 シリーズ ミクロの生命体「微生物ハンターが人類を救う」	株式会社テレビ朝日

第36回2005年以前の受賞番組・放送局は、ホームページ(<https://takayanagi.or.jp>) 科学放送高柳賞をご参照ください。

■ 第1回～第27回 科学放送振興協会 主催 (うち、第16回～第27回 高柳記念財団 後援)/ 第28回～ 高柳記念財団・高柳健次郎財団 主催

■ 役員名簿

理事	末松 安晴 (非常勤)	理事長 東京工業大学栄誉教授
	羽鳥 光俊 (非常勤)	東京大学名誉教授 国立情報学研究所名誉教授
	松崎 淳嗣 (非常勤)	株式会社国際技術顧問事務所 代表取締役
	児野 昭彦 (非常勤)	日本放送協会 専務理事・技師長
	篠原 弘道 (非常勤)	日本電信電話株式会社 取締役会長
	古屋 一仁 (非常勤)	東京工業高等専門学校名誉教授
	坂井 勝則 (非常勤)	専務理事
	鶴田 雅彦 (常勤)	事務局長
評議員	相磯 秀夫 (非常勤)	東京工科大学 理事・名誉教授 慶應義塾大学名誉教授
	餌取 章男 (非常勤)	科学ジャーナリスト 京都先端科学大学 総合研究所 客員教授
	藤本 正熙 (非常勤)	一般社団法人日本オーディオ協会 顧問
	井上 勇三 (非常勤)	株式会社東京放送ホールディングス 社長室顧問
	吉野 武彦 (非常勤)	元日本放送協会 専務理事・技師長
	桂 靖雄 (非常勤)	パナソニック株式会社 客員・元代表取締役副社長
	寺崎 明 (非常勤)	一般財団法人 情報通信振興会 理事長
	小松 弥生 (非常勤)	埼玉県教育長 元文部科学省研究振興局長
監事	飛田 和男 (非常勤)	元株式会社ネクストジェン 常勤監査役
	森川征治郎 (非常勤)	税理士

■ 委員名簿

〈選考委員会〉

- ・電子科学技術の分野で独創的な研究に取り組む若い研究者への研究奨励賞の選考
- ・電子科学技術の分野で優れた研究業績により、科学技術並びに産業の発展に貢献された方々の功績に対する高柳健次郎賞・同業績賞の選考

委員長	羽鳥 光俊	東京大学名誉教授 国立情報学研究所名誉教授
委員	後藤 敏	早稲田大学 名誉教授 エジプト日本科学技術大学 副学長
	荒井 滋久	東京工業大学 名誉教授
	三谷 公二	日本放送協会 放送技術研究所 所長
	川村龍太郎	日本電信電話株式会社 サービスイノベーション総合研究所 所長

〈審査委員会〉

国内の放送局でテレビ放映された優れた科学放送番組に対する科学放送高柳賞（最優秀賞・優秀賞）の審査

委員長	餌取 章男	科学ジャーナリスト 京都先端科学大学 総合研究所 客員教授
副委員長	松崎 淳嗣	株式会社国際技術顧問事務所 代表取締役
副委員長	奥野花代子	神奈川県立生命の星・地球博物館 名誉館員
委員	相生 啓子	特定非営利法人日本国際湿地保全連合 顧問
	青木 恒夫	元日本ビクター株式会社 コーポレートコミュニケーション部長
	榎並 和雅	国立大学法人東京工業大学 監事(常勤)
	竹中 一夫	元株式会社放送衛星システム 代表取締役社長
	所 眞理雄	株式会社オープンシステムサイエンス研究所 代表取締役
	並木 康臣	元日本ビクター株式会社 理事・技術本部技術戦略部長
	元村有希子	株式会社毎日新聞社 論説委員
	由利 伸子	有限会社サイテック・コミュニケーションズ 代表取締役

公益財団法人 高柳健次郎財団

〒102-0082 東京都千代田区一番町4番地5 ニューライフー番町309

TEL: 03-3239-1207 FAX: 03-3262-3028

E-mail: tkinenz@oak.ocn.ne.jp

<https://takayanagi.or.jp>

Kenjiro Takayanagi Foundation

4-5-309, Ichiban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082 Japan

Tel: +81-3-3239-1207 Fax: +81-3-3262-3028